中大高通信　令和７年６月号

文責：仲森友英（教頭）

　髙倉校長先生とともに一昨年四月に着任しましたが、早くも三年目を迎えることとなりました。新年度がはじまって早くも二カ月が経ち、中学生のあどけなさが残っていた「新入生」も立派な「一年生」となってきました。二年生も三年生もあれこれと経験しながら順調に日々過ごしています。
　学校として一息ついた六月に学校だよりをお届けします。

◆◆◆　　◆◆◆　　◆◆◆

　入学式、始業式からはじまる怒涛の二カ月が過ぎ、中大高校はようやく一息つける六月を迎えています。教頭としての息抜きは、各学年の教室巡りと何とか参加している演劇部の稽古です。生徒の様子を眺めるとともに、にぎやかな雰囲気に触れ、学校に勤める喜びを感じることができるからです。そうした学校散歩の中で得たことを行事と絡めながらお伝えしたいと思います。

　一年生は、五月中旬に中間考査があり、中学とは異なる高校のレベルの高さを実感したようです。生徒たちからは、大変だった、難しい、という言葉が口々に出てきますが、教室でははしゃいでいる声が響いており、この状況は例年通りと感じています。その中間考査後に迎えた一学期最大の行事が「ホーム・ルーム合宿」です。こちらは富士山麓において二泊三日、二年生の先輩とともに宿泊するという本校恒例の宿泊行事です。この中には、飯盒炊爨やチームビルディング、球技大会などが盛り込まれており、自分を律して行動することを基本テーマとしています。二学年合同で実施する「目論見」としては、先輩の行動を見て来年の自分を想像してほしいということがあります。その成果が出るのは来年ですが、ぜひ期待したいと思います。

　一方、二年生は一番高校生活を実感できる年を迎えました。クラブ活動では三年生が引退していくため、自分たちが中心になることをいやがうえにでも実感します。一足早くスタートを切っている文化祭準備も二年生が中心であり、試行錯誤しながらも日々頑張っています。もちろん愚痴も出ますが楽しそうであり、教員としては、ぜひともこの経験を活かして「レジリエンス」を高めてほしいと願っています。
　話をもとに戻しまして…。そうした中心学年としてのホーム・ルーム合宿ですから、引率教員からは「大変かもしれないけど後輩を導いてほしい」という期待値が高まって自覚を促す注意も増えていきます。その声かけによってどこまで気づけるか、気づかせることができるか、生徒も教師も問われます。

　林間学校を実施している間、三年生は修学旅行に行きます。今年はコロナ禍明け初めての飛行機移動が復活し、四泊五日の沖縄・石垣旅行でした。体験学習の時には雨が上がるという天気にも恵

まれ、とても楽しい日々となったようで、東京へしばらく帰りたくないというメッセージが親御さんに届いたという噂も耳にしました。

三年生での修学旅行実施も附属らしいのですが、これからもまだ文化祭と体育祭という二大行事が残されています。先ほど述べたように学校運営の主体、そして文化祭は「二年生」とはいっても、体育祭だけは三年が仕切ります。今、運営委員は担当の先生と種目決めなどあれこれ相談しており、応援団（ダンスパフォーマンス）の結成準備とともに忙しい日々を過ごしています。

◆◆◆　　◆◆◆　　◆◆◆

学校は現在、一歩一歩期末考査へ進んでいます。それが終わると答案が一気に返却され、成績がつき、それにもとづく三者面談です。その間、附属校生向けの限定イベントが行われるなど忙しい日々が続きます。そうこうしているとあっという間に夏休みを迎えます。

ホーム・ルーム合宿、修学旅行を一つの節目とすると、この夏休みが次の節目であり、生徒たちの顔つきがまた変わる時です。毎年、私の中でも楽しみにしている季節です。